

Echoes of Time

景 色 が 受 け 継 ぐ 能 代

15～18ページは、能代市市制20周年記念事業の一環で実施する
秋田公立美術大学と能代市の連携による特集ページです。

vol. 03

January, 2026

時
を
超
え
た
邂
逅

撮影地である能代市常盤の「大柄（おおがら）の滝」は、江戸時代の紀行家・菅江真澄も訪れた景勝地である。今回は、二枚の写真と二百年前の旅人である真澄の紀行を比較することで、滝と人との時を超えた関係を浮かび上がらせることを試みる。（撮影場所：大柄の滝）





紀行と写真、

二百年の隔たりを超える

文化4年（1807年）、大柄の滝に降り立った真澄は、以下のように記しています。

石の不動尊がたっている。滝は西の方から、提（口つき鍋）・はんぞう（浅いたらい）の水をこぼすように落ち、山風に吹き散らされて、軒の雨だれのように岩面にかかるところもあった。

〔菅江真澄遊覧記4〕一九〇頁

今回の二枚の写真は、この描写と驚くほど呼応しています。草薨さんは真澄の紀行文を知らずに撮影に臨みましたが、カラー写真では「石の不動尊」に焦点を合わせ、モノクロ写真では、水がこぼれ落ち、岩肌を濡らす情景を鮮明に捉えています。まるで真澄の視覚体験をなぞっているかのようです。

るかのようです。

しかし両者を比較すると明確な相違も見えてきます。真澄の記述は、この場所を形づくる要素そのものに焦点が当てられています。引用部のほかにも、広い滝壺、裏見の滝、岩間のアマツバメなど、滝を特徴づける要素を列挙し、さらに俯瞰的な絵図を描くことで「全体像」を伝えようとしています。

一方、草薨さんの写真からは、滝とそれを取り巻く要素との「関係性」が読み取れます。象徴的なのが、滝と不動明王像を写した一枚です。画面の半分を占めるのは、ピントの外れた滝。水飛沫がかるうじて粒として認識できるシャッタースピードで捉えられた滝は、輪郭が曖昧な「刹那的な存在」として立ち現れます。対照的にその奥には、くっきりと写し出された不動明王像が鎮座しています。苔むし、周囲の朽ちた様子は、この場所に積み重なった

「長い時間」を想起させます。すなわち、この写真には異なる二つの時間が視覚化され、対置されているのです。

もう一枚のモノクロ写真は、さらに異なる時間を示唆します。シャッタースピードを落としたことで、水は粒子ではなく線となり、一筋の連続体へと転じています。この白い流れを抱え込むように、馬蹄形の岩壁が明暗の対比を伴って現れます。特徴的な岩壁の地形は、水の浸食作用によってつくられたものであり、地質学的な長大な時間を感じ取ることができます。ここでもまた、目視可能な水流の持続的な運動と、超長期的な地形の生成という二つの時間が重なり合っています。

真澄がこの滝を訪れたのは、人づてに「おもしろい滝がある」と聞いたことがきっかけでした。一方、草薨さんにとって大柄の滝は、情報も写真も多く残る既知の場所でした。

それゆえ、滝の「全体像」ではなく、複層的な時間が集積された「関係性」を主題にすることができたのでしょう。

大柄の滝という場所に新たな奥行きをもたらした両者の邂逅。それは、風景とは固定されたものではなく、視線を変えることで絶えず更新可能な存在であることを、私たちに教えてくれています。

〔参考文献〕

◎菅江真澄『菅江真澄遊覧記4』、平凡社、1967年9月

◎ブライアン・J・ハドソン『図説滝と人間の歴史』原書房、2013年12月

Echoes of Time

（エコーズ・オブ・タイム）

景色が受け継ぐ能代

vol.03 | January, 2026

写真 草薨 裕
執筆 井上宗則
デザイン 越後谷洋徳
編集 高橋ともみ
企画 秋田公立美術大学
制作 NPO法人アーツセンターあきた

能代市市制20周年記念事業業務委託